

# 概説：ムリッド教団(4)

—— セネガル共和国の社会経済理解に向けて ——

正 木 響

## 目 次

- I. はじめに
- II. 西スーダン地域のイスラーム化とウォロフ社会
  - II. 1. 西スーダン地域のイスラーム化
  - II. 2. ウォロフ伝統社会の社会階層構造とイスラームの浸透
  - II. 3. 19世紀：ウォロフ社会に対するフランスの侵攻とスーフィー教団の興隆  
(以上 第33巻第1号)
- III. セネガンビア地域とスーフィズム
  - III. 1. スーフィズムとは
  - III. 2. セネガンビア地域のタリーカ
- IV. アマドゥ・バンバの人生とムリッド教団
  - IV. 1. ムリッド教団の誕生
  - IV. 2. イブラ・ファルとバイ・ファル
  - IV. 3. 迫害から融和、そして発展へ  
(以上 第33巻第2号)
- V. アマドゥ・バンバ亡き後の教団組織と政治
  - V. 1. アマドゥ・バンバ亡き後の教団組織
  - V. 2. マラブー、シェイク、タリベ
  - V. 3. 政治および国家との関係
    - V. 3. 1. 教団と国家
    - V. 3. 2. 2012年の選挙を巡って
- VI. ムリッドの社会経済空間
  - VI. 1. ダーラと農村共同体
    - VI. 1. 1. セネガルのダーラ
    - VI. 1. 2. ムリッド教団のダーラと農村共同体
  - VI. 2. 労働と奉仕
  - VI. 3. 寄進  
(以上 第34巻第1号)

Ⅶ. 農村(農業)から都市(商業)へ

Ⅶ. 1 農村から都市へーダイラの役割ー

Ⅶ. 1. 1 ムリッド教団における伝統的なダイラ

Ⅶ. 1. 2 シェイクータリベ関係を越えるダイラ

Ⅶ. 1. 2. 1 新しいタイプのダイラ出現の背景

Ⅶ. 1. 2. 2 ヒズブ・タルキーヤ

Ⅶ. 1. 2. 3 ダイラ・マトラブル・ファウザイニ

Ⅶ. 1. 2. 4 ダイラ・マム・ジャーラ・ブッソ

Ⅶ. 2 ムリッド信徒と都市の経済活動

(以上 本稿)

(続く)

Ⅶ. 農村(農業)から都市(商業)へ

Ⅶ. 1 農村から都市へーダイラの役割ー

これまでみたように、ムリッド共同体の基盤は農村にあったが、20世紀初頭の時点で、既に農閑期に都市に出て物売りなどに従事し、雨季の前の7月ごろに農村に戻るムリッドの信徒がいたことが報告されている(Babou2007: 201)<sup>1)</sup>。そして、農地の拡大が困難となる中で増える人口が養えなくなり、都市に移住し、そこを生活の基盤とする信徒が見られるようになった。とりわけ1945年に発生した飢饉と干ばつは、人々を都市へ移動させる大きなプッシュ要因になったといわれている。ルイス＝ラニス＝フェイモデルに代表される二重経済モデルにみるように、農村から押し出された人々は、都市にスラムやインフォーマルセクターを形成する。とりわけ、ムリッド教団においては、ウォロフ伝統社会のカースト階級に属するものが少なくなく、彼らは都市で職人として、そうでないものは行商を中心とするサービスセクターに就き、ダカールのインフォーマルセクターの発展に寄与することとなった。

アラビア語で円(サークル)を意味するダイラは、英語や日本語のサークルと同様に、人々の集まりやアソシエーションを指す。ムリッド教団の中にダイラという制度を最初に導入したのは、初代ハリフ・ジェネラルであったが、1960年代に入るまでその活動はあまり活発ではなかった。セネガルのダイラ研究で多くの業績をあげているモマル・クンバ・ジョップによると、独立以前の段階で、首都ダカールはティジャーニー教団の信徒がマジョリティーを

占めており、ムリッドの信徒たちが集まって住むような地域は存在せず、彼等は、他の教団の信徒が大多数を占める都市空間でマイノリティとして生活することを余儀なくされていたという(Diop, M. C. 1981:79)。第二代ハリフ・ジェネラル、セリーヌ・ファローなどは、ダカールに流出した信徒に、そこを去って、再び内陸に戻るよう呼びかけさえしている(Babou 2007:203)。これに対して、資本財を取り入れて農業の生産性向上に尽力し、結果的にセネガルの農民と呼ばれつつも、商業活動に価値を見出したのが第三代ハリフ・ジェネラルのアブドゥル・アハドであった。彼は、ババカル・ケベ(Babacar Kébé)やジリ・ンバイ(Jily Mbay)といったセネガルを代表する企業家とも親交があり、アハドがダカールのケベ宅に滞在した1980年以降、ダカールでのダイラの活動が活発化した(Babou 2007)。他の教団組織でもダイラは形成されるが、セネガルでダイラの活動が活発な要因は、以下にロザンデルが指摘するようなセネガル社会が持つ特徴とも不可分である。

セネガル社会では、人々は皆、何らかのグループに統合されることに熱心である。いずれのグループに所属することなく、孤独でいることを望む、もしくはそれができる者はいない。一人であるということは、アウトサイダーで孤立していることを意味し、それは、狂人のみが可能なことである。各自の生活は外部からわかりやすく、周りの社会に理解されえるものでなければならない。これは人間の社会的、倫理上の義務であり、各人の正直さを強調するかのごとく、食事、仕事、エンターテイメントといったことは一緒になってなされなければならない。つまり、(ダイラのような\*)アソシエーションは、一緒に何かを行う際の適切な枠組みであり、妥当な形なのである(Rosander 1997:111)。

訳は筆者によるもの、(\*)は筆者による追記。

現在のセネガルで、日本で既に珍しくもなくなった「死後数日たって発見される孤独死」や「無縁社会」のような状態が起こりえないことに多くの研究者は同意するであろう。良きにつけ、悪きにつけ、家族や地域社会のつながりが強く、人々は常に仲間と行動しているかのような印象を我々に与える。まさにダイラは、こうした特徴を持つセネガル社会に適合した仕組みであり、社会の変化に合わせて進化を遂げながらセネガル社会で重要な基盤を形成している。以下では、ムリッド教団に古くからみられる伝統的(一般的)なダイラと、1970年代以降に出現する新しいタイプのダイラそれぞれについて論じる。

## VII. 1. 1 ムリッド教団における伝統的なダイラ

先にみたように、ムリッド教団のダイラは、ハリフ・ジェネラルのイニシアティブで、都市に移住した信徒が定期的集まる機会を提供する場として導入された。したがってダイラはバンバの地位を継承したハリフ・ジェネラルを象徴に掲げながら活動を展開しているが、実際に各ダイラがアディア(Haddiya)を貢納するシェイクがハリフ・ジェネラルになるとは限らない。その背景には、第V章でみたように、バンバ亡き後、ムリッド教団で後継争いが続いたことがある。バンバの跡を継いで初代ハリフ・ジェネラルに着いたのは、長男のママドゥ・ムスタファであったが、第二代ハリフ・ジェネラルには、その息子ではなく、初代の弟ファローが就くことになった。この時に、初代ハリフ・ジェネラルのダイラは、ママドゥ・ムスタファ支配下に入るか、ファローの支配下に入るかの決断を迫られ、緊張関係が形成されることになった(Diop, M. C. 1982b : 304)。続いてファローの死後、ハリフ・ジェネラルの地位は弟のアブドゥル・アハドに渡ったが、この時アブドゥル・アハドは、ファローの息子が父のダイラを引き継ぐことを認めたため、これにより、ダイラを直接監督指導するシェイクがハリフ・ジェネラルではないという事例が出現することとなった(Diop, M. C. 1982b : 304)。ただし、これらハリフ・ジェネラルやシェイクはあくまでもダイラが活動する際の象徴もしくは指導者の位置づけでしかなく、実際にダイラの運営に責任を持つのはメンバー達が選挙で選んだ代表になる。副代表、会計、事務局長なども選挙で選ばれる。

先述のジョップは、ダイラの機能として以下にみるような三点を挙げている(Diop, M. C. 1981 : 80)。一つ目は、トゥーバに住むシェイクにとっての機能である。前稿でみたように、タリベの数はシェイクの力の源でもある。ダカールなどの都会に出てしまったタリベを組織化することで、シェイクとタリベの関係維持が可能となり、必要に応じて教団の情報を伝えたり、逆にタリベに労働や資金を提供するよう働きかけたりすることが容易になる。

二つ目は、タリベにとっての機能である。人々の都市への移動に伴い、農村で共同体を形成していた信徒達は分散することになった。都市で形成されたダイラはこうしたタリベを結集させる機能を持ち、組織化された集団は、問題解決の手段としても機能する。信徒達は、ダイラという中間組織を通じ

て行政機関に働きかけ、場合によっては政治的圧力団体にもなりうる。

三つ目は宣伝活動としての機能である。ジョップは、これについては内部の人間にとっての機能と外部に向けての機能の二つがあることを示す。内部に対しては、なにがしかのイベントや宗教儀式を通して組織内で信徒の連帯感を高める効果が期待できる。他方で、外部に対しては、自分たちの存在や活動、バンバの思想を知らしめることが可能になる。典型的なイベントとしては、1895年にバンバがガボンに流刑されたことを記念して、サンルイやダカールで毎年開催されるマガルが挙げられる。マガルといえは、トゥーバで開催されるグラン・マガルが最も知られているが、これは教団の中のグラン・マガル組織委員会が開催する。これに対してサンルイやダカールで開かれるマガルは、1970年代半ば以降にそれぞれの都市のダイラが、バンバのガボン流刑を記念して自発的にはじめたもので、年々、規模が大きくなっている<sup>2)</sup>。筆者は、偶然、2006年、サンルイ滞在中にこのマガルに遭遇したが、昼から朝方まで、三日三晩、町中を揺るがすような大騒ぎに辟易した。近隣の町から、大勢の信徒がサンルイ島に集まり、ジュンベや鐘をもった人々が町を練り歩き、ヨーロッパのイベントなどでもよくみる「スティルトウォーカー」<sup>3)</sup>なども登場し、街のあちらこちらでそうした信徒をもてなすための炊き出しが行われていた。次稿で詳述するが、今や、ダイラはセネガルの都市にとどまらず、海外の主要都市でも形成されており、毎年、各地で開催される文化週間などを通じてバンバの思想やムリッド教団の存在を外部社会に知らしめる機能を果たしている。

ダイラには目的やメンバーの特徴に応じていくつかの種類がある。もっとも多く存在するのが、近くに住む信徒たちが集まって地域で形成するダイラである。これ以外にも役所といった職場や商人といった職業が縁で形成されるダイラ、大学や高校の学生・生徒の宗教活動の場としてのダイラ、バンバの詩に独特の節をつけた歌(khassaideハサイド)を集団で練習もしくは唱和するためのダイラ、パイ・ファルのダイラなどがよく知られている。このうち学校内のダイラやハサイドのダイラは、我々先進国でよくみられる大学サークルや地域サークル活動を彷彿させる。なお、マイクを使って大声を張り上げて歌うハサイドのダイラは宗教上の理由で男性のみのダイラになる。これ

に対して女性たちはトンチン(ウォロフ語では*nat*)と呼ばれる<sup>4)</sup>、頼母子講(貯蓄組合)を目的としたダイラ活動に熱心である。周知のように、アフリカでは、依然として銀行口座を持たない人が多い。日本と異なり、銀行は手間がかかる割に取引額が小さい小口預金者を歓迎せず、口座の維持に費用がかかることが多いからである。しかし、銀行口座を持たずにまとまった金額を貯めることは難しい。手持ち現金をいつのまにか使ってしまうということのみならず、盗難や親族から無心されるリスクが常に存在する。そこで女性たちはトンチンを目的とするダイラを形成して定期的に決まった金額を持ち寄り、一人の人にそれを託す。数回に一回、まとまった金額を手にした女性たちは、それを新たな事業に投じたり、子供の教育や結婚式の費用に充てたりする。このメカニズムがうまく機能するためには一人のメンバーたりとも裏切らないことが前提となる。このときに同じ教団に属するという事実は、そうしたリスクを小さくする。なおトンチンには大きく分けて2つのタイプがある。一つは、ここでみるような回転型貯蓄信用講(Rotating Saving and Credit Association: ROSCA)と呼ばれるもので、順番がまわってきたときに一人の人がまとまった金額を得られる形である。もう一つは、貯蓄信用グループ(Accumulating Savings and Credit Associations: ASCRA)と呼ばれるもので、これで集められた資金はコミュニティの目的のために使われる(Bouman 1994)。後述するように、ROSCAのためのダイラとは別に、ムリッドのダイラでは、ASCRA型のトンチンも盛んに行われている。

以上にみるように、ダイラにもさまざまなタイプがあり、一人の人が複数のダイラに参加することも珍しくない。また、これら複数のダイラを地域単位で統括するダイラ連盟も存在する。

ダイラでは、毎週、ダイラのメンバーが集まって会合を開く。会合が開かれる場所は、職場の場合は職場の建物の一室が利用されることもあるが、多くの場合はメンバーの個人宅になる。ダイラの為に場所を提供できることは名誉で喜ばしいことと理解されている(Diop, M. C. 1982b: 310)。会では定期的開催されるイベントに関する話し合い、バンバの教えやイスラームについての勉強会、ハサイド、献金活動などが行われる。年に一度のグラン・マガルにも、ダイラのメンバーで連れ立って参加し、集団でシェイクを訪問(ジ

アラ)することも珍しくない。近年では、Facebookや独自のホームページを開設しているダイラも少なくなく、最新の技術を取り入れながら、時代にあわせて活動を進化させている様が観察される。

ダイラのメンバーは週もしくは月ベースで会費を支払う。金額はダイラによってまちまちで、高額所得者の多いダイラの会費は高く、そうでないダイラでは低い。集まった会費は、まずはダイラの運営資金として、次にメンバーの冠婚葬祭、そしてハリフ・ジェネラルやシェイクへの寄付金などに使われる(Diop, M. C. 1982b : 304)。第Ⅵ章で、モスクや図書館そしてトゥーバの整備などで資金が必要な際にはハリフ・ジェネラルが信徒に寄付を呼びかけることに言及したが、ダイラはそうした資金集めを行う組織としても機能する。また、セネガルのトンチンの概要をまとめたBalkenhol and Gueye(1994)では、特にムリッド信徒達がダイラで相互扶助を目的としたトンチンを行っていることが報告されている。つまりトンチンという形でメンバーから一定額を定期的に徴収し、メンバーの誰かが火事、盗難、自然災害などに見舞われた際に拠出されるのである。この場合、先に見たROSCAというよりも、むしろASCRAに近く、メンバーにとっては貯蓄というよりも保険の機能をもったトンチンになる。このように、ダイラではさまざまな形でメンバーから資金が徴収され、公の目的のために使われる。

冒頭にみたように、当初、ダイラは、経済危機によって農村から都市に移住したタリベと、トゥーバのハリフ・ジェネラルやシェイクとの関係を維持するための組織であった。しかし、同じシェイクのタリベであるという事実は、タリベの間に信頼関係を醸成することに繋がり、単なる宗教組織を超えて、都市で生き抜くための共同体としても機能する。現在は、セネガルの都市部のみならず、世界各国に移り住んだセネガル移民の出会いの場にもなっている。そういう意味ではまさしくグラス・ルーツな組織である。グラス・ルーツな組織の場合、時を経て中心人物や構成員の入れ替わりに伴い組織の理念や雰囲気が大きく変わることが珍しくない。したがって、組織の根幹が揺らがないようにするためには、構成員を統合するための理念や象徴を必要とする。ムリッド教団のダイラにおいては、バンバの思想やハリフ・ジェネラルという存在がそうした機能を担っている。

## VII. 1. 2 シェイクータリベ関係を越えるダイラ

## VII. 1. 2. 1 新しいタイプのダイラ出現の背景

1970年代以降、セネガルでは前項にみたような「伝統的なダイラ」に収まりきらないダイラが形成されるようになった。その背景には、旧態依然とした教団組織を見直し、より近代的な組織を模索する動きが、外部からのみならず内部からも強まったことがある。本研究では、セネガルにおけるスーフィー教団の成り立ちとその発展、そしてそれが社会経済に与える影響についてマリッド教団を中心にみているが、実は、こうしたスーフィー教団で観察されるマラブー中心主義のイスラームに批判的な勢力がセネガルに存在しなかったわけではない。たとえばサンゴールの右腕として首相を務めながらも、急進的であるとの理由で、1962年に政権を追われたディアは、セネガル独特のイスラームに対する批判からイスラーム改革運動を興したシェイク・トゥレと親しい関係にあった。このトゥレは、グリグリ信仰やマラブー個人崇拜が際立つセネガルのイスラームは、あるべきイスラームから逸脱していると主張し、コーランの暗誦に始終する伝統的なダーラの在り方にも苦言を呈し、スーフィー教団のマラブー達と緊張関係にあった。またトゥレは植民地行政にも批判的な立場をとり、シャルル・ド・ゴールがアフリカの植民地に「独立するか、フランス共同体という枠組みにとどまってフランスとの紐帯を維持するか」について国民投票を通じて問うた際には、フランス共同体参加を否決するよう呼びかける運動を展開したことから、フランス植民地政府からも危険視される存在であった(Loimeier 1998:161)。しかし、トゥレとその仲間が改革運動のために1953年に設立したムスリム文化同盟(Union Culturelle Musulmane:UCM)は、ディアの事件以降、イスラームに関してサンゴールの顧問を務めていたドゥクレ(Tahirou Doukouré)の監督下におかれ、サンゴールと近いスーフィー教団のマラブー達が影響力を持つ組織に変貌した(Loimeier 1998:162)。また、サンゴールのセネガル進歩同盟(Union Progressiste Sénégalaise:UPS)と近い関係にあるスーフィー教団 — とりわけティジャーニー教団とマリッド教団 — の若いマラブー達が創設したセネガルイスラーム教団連盟(Fédérations des Associations Islamiques du Sénégal, 以下FAIS)の中に改革者たちが取り込まれることによって、セネガルのイスラーム



ム改革運動は沈静化した(Loimeier 2009 : 240)。

しかし、こうした改革運動が、1970年代後半以降、再びセネガルで注目を集めるようになった。セネガルにおけるイスラーム改革運動に詳しいロワメイエルは、国家の下で事実上管理されているスーフイー・タリーカという実態を疑問視する見方が強まったこと、ンバケ家一族内での教団の運営を巡る対立、特に世代間対立が表面化したことが背景にあると指摘する(Loimeier 2009 : 243)。また、トゥレとその仲間も、骨抜きとなったUCMを1979年に脱退し、アラビア語で「慈悲深い神を崇拝する者達」を意味するJIR (Jamâ 'at 'ibâd ar-Rahmân)や「イスラーム文化を求める者達の運動」を意味する”Harakat al-falah li-l-thaqafat alislamiya”を立ち上げ、さらに1985年にはFAISのライバルとなる「イスラーム的行動のための組織」(l'Organisation pour l'action islamique : OAI)を設立するなど、改めてイスラーム改革運動を主導した(Loimeier 1998 : 163-165)。ただし、この頃には、ムリッド教団の第3代ハリフ・ジェネラル、セリーヌ・アブドゥル・アハドからトゥレは資金援助を受けており(Loimeier 1998 : 164)、マラブー批判というよりは、望ましいイスラームを探求する形へと活動の主体を変化させた。他方、スーフイー教団の中心においても、トゥレのような批判者の声に耳を傾け、伝統に安住することなく、望ましいイスラームとは何かを探究する人たちが出現することとなる。比較的長い期間、ムリッド教団のハリフ・ジェネラルの地位にあったセリーヌ・アブドゥル・アハド(第3代)やセリーヌ・サリオー(第5代)も、旧態依然とした教団組織を改革しようと新しい試みに果敢に挑戦した。以下にみる新しいタイプのダーラも、そうした探究者たちが導き出した一つの形といてよく、ここでは、大学のキャンパス内に形成されたダイラから教団のシンクタンクの地位に格上げされたヒズブ・タルキーヤ(Hizbut Tarqiyyah)、世界に散らばるムリッド・ディアスポラが創設したダイラ・マトラブル・ファウザイニ(Matlabul-Fawzayni、もしくはMatlab al-Fawzayni)そして、バンバの母の名を冠したダイラ・マム・ジャーラ・ブッソ(Mame Diarra Bouso)の3つについて紹介したい。

## VII. 1. 2. 2 ヒズブ・タルキーヤ

ヒズブ・タルキーヤの前身は、1975年12月に、第3代ハリフ・ジェネラル、

アブドゥル・アハドの承認を得て、ダカール大学(現シェイク・アンタ・ジョップ大学)のキャンパス内に創設された「ダカールにおけるムリッド学生のダイラ」(Le dahira des Etudiants Mourides de Dakar : 以下DEM)である<sup>5)</sup>。創設から5年後の1981年1月、ダカールの中では比較的新しい地域で、内陸からダカールに流入した信徒が多く移り住んだシカップ(Sicap)地域にDEMは宗教や文化の学び舎(centre)となるダーラを創設した。そして1989年からは、ダカールに留まらず、国全体に活動の範囲を広げるようになった。前稿でみたように、本来、ダーラはバラカをもったシェイクやマラブーによって創設されるもののはずであるが、彼らはそうした慣習に囚われることなく、高等教育を通じて得たイスラームの知識を人々に供与するためのダーラを創設したのである。これはマラブー個人崇拜の下でクルーアンの暗誦に始終するような従来のダーラとは大きく異なり、より専門的な知識を求める人々から支持された。こうしたことが評価され、1992年1月のジアラの際に、第5代ハリフ・ジェネラルのセリース・サリオーによって、DEMは「ムハンマドへの奉仕者 ーつまりバンバーの指導の下で、高い精神性に到達した人々の一派」を意味するヒズブ・タルキーヤ(Hizbut Tarqiyyah)という名称を授けられ、ハリフ・ジェネラルの諮問機関的役割を果たす組織に格上げされた。そして1995年には、各地にばらばらに点在していた部署を統合して本部とし、活動の拠点をトゥーバに移して教団内部で大きな力を持つ組織へと変貌した。現在、代表を務めているのは、ダカール大学で地理学の学士を、続いて修士を取得し、DEM創設時から中心メンバーとして活動しているアトゥ・ディアニュ(Atout Diagne)である。彼は、「ムリッド教団内のリーダーシップはンバケ家出身者に限定される必要はなく、いずれのムリッド信徒もハリフ・ジェネラルになる可能性を持つべきであり、バンバに対する忠義の方がバンバの子孫に対する忠誠心よりも重視されるべきである」との考えを堅持しており(Loimeier 2009: 244)、血筋を重視する一部のンバケ家の人々とは険悪な関係にある。

そもそも、植民地支配の影響を強く受けた公教育で教育を受けることのないムリッド教団のハリフ・ジェネラルやトゥーバにいる高名なシェイク達は、ウォロフ語やアラビア語を理解しても、フランス語や英語は基本的に話さない。これに対して、ダカール大学は、フランス領アフリカ屈指の高等教育機

関の一つであり、そこに入学した学生は、小学校からフランス式の教育を受けてバカロレアに合格したエリートであるのが一般的である。現在においてもセネガルの成人の識字率は50%程度、近年においても中等教育課程の就学率は30%程度にすぎず<sup>6)</sup>、これら少ない中等教育修了者からさらにバカロレアに合格するのは39%程度に留まる<sup>7)</sup>。つまり、依然として大学進学者が限られているセネガルでは、ヒズブ・タルキーヤのメンバーは語学のみならず、西欧の文化慣習に通じた知識人と認知されている。フランス式教育を受け、西欧の価値感を十分に知りながら、あえてイスラームの価値感を重視するという姿勢の根幹となっているのは、強い信念に裏打ちされたバンバに対する敬愛と、唯一神への帰依に他ならない。したがって、生まれ落ちた環境に従って、ただ漫然とシェイクやマラブーの座にいる者に対しては辛辣な姿勢を見せる者もいる。

1995年にダイラ・ヒズブ・タルキーヤの本部がトゥーバに設置されて以降、ヒズブ・タルキーヤとハリフ・ジェネラルとの関係は以前にも増して緊密になり(Guèye 2002 : 247-248)、1995年にハリフ・ジェネラルから翌年のグラン・マガル開催の付託を受けて以降、ヒズブ・タルキーヤの影響力はより強まることとなった(Loimeier 2009:244)。しかし、これは、1995年までマガルの開催を任されていた、第5代ハリフ・ジェネラル、セリーヌ・サリオーの息子、ムスタファ・サリオーの権力失墜を意味した<sup>8)</sup>。しかしながら、その翌年、トゥーバで、両者が一触即発の状態となったことから、ハリフ・ジェネラルのヒズブ・タルキーヤに対する評価もまた落ちることとなった(Villalon, L. A. 1999 : 140)。実際、ンバケ家以外の人間が教団の中で影響力を持つことに不満を持つ人は依然として少なくない(Loimeier 2009:244)。ヒズブ・タルキーヤ内部での対立についても外部に漏れ聞こえてくる。

ヒズブ・タルキーヤの主な役割は、宗教教育の提供、毎日5回行う祈りやグラン・マガルの開催を含む宗教儀式の実施、そして調査研究機関としての任務の3つになる。2006年にはムリッド教の教育研究国際研究所(l'Institut International d'Etudes et de Recherches sur le Mouridisme)を創設し、バンバの教えや教団の活動を英仏語に翻訳して海外に伝えたり、海外の研究者や組織となんらかの連携もしくは共同プロジェクトを行う際にカウンターパートとし

での役割も果している。2015年からセネガルで地上デジタル放送が導入されるのに先駆けて、ムリッド教団やバンバの教えを英仏アラビア語で伝えるために、アル・ムリディーヤ (Al Mouridiyyah) と名付けられたテレビプログラムを2013年12月14日からインターネットで配信することが、先日、発表されたが、これもダイラ・ヒズブ・タルキーヤが中心となって展開している事業の一つである。このように、ヒズブ・タルキーヤは、構成員の高い教養と専門知識を活かしながらハリフ・ジェネラルを支えるための活動を展開している。

### VII. 1. 2. 3 ダイラ・マトラブル・ファウザイニ

1990年に、スペインで生活するムリッド信徒達が結成したマトラブル・ファウザイニもヒズブ・タルキーヤと同列に論じられる先進的なダイラの一つになる。しかし、このダイラについての文献情報は少なく、筆者の知る限り、シェイク・ゲイ (Cheikh Guèye) が2002年に刊行した *Touba : La capitale des mouride* (トゥーバ: ムリッドの都) およびハディム・シーラ (Dr. Khadim Sylla) 博士による未刊行のレポートに限定される<sup>9)</sup>。ここではこれら2つの文献に依拠しながら、組織の成り立ちや概要を紹介したい。マトラブル・ファウザイニとは、「現世と来世という二つの世界での幸せの探究」を意味するアラビア語で (Guèye 2002: 249)、バンバが存命中に著した書物のタイトルに由来する。この名前をダイラに授けたのは第5代ハリフ・ジェネラルのセリーヌ・サリオールである (Sylla 2010: 20)。したがって同じ名前を冠した組織や企業は他にも存在するので注意が必要である。マトラブル・ファウザイニを創設したダム・ンディアイ (Dame Ndiaye) は、1974年に故郷のンディアンブルを離れ、アフリカ各国 (マリ, コートジボワール, ニジェール, ナイジェリア, カメルーン, チャド, リビア, エジプト, モロッコ), ヨーロッパ (フランス, ドイツ, ベルギー, イタリア), そしてアメリカ各地を転々とし、1984年に最終的にスペインに辿りついたという経歴の持ち主であった (Guèye 2002: 249-250)。彼は、スペインを拠点に、モロッコやアメリカを往来して国境を越えた商業ネットワークを構築する傍ら、スペインの首都マドリッドのダイラの代表として、セネガルからフォーマルもしくはインフォーマルにマドリッドに出稼ぎにくるムリッド信徒の面倒を見たり、信徒から寄付金を集めて、定

期的にトゥーバのハリフ・ジェネラルに送金したりする活動に熱心に取り組んでいた。こうした活動を通じて、彼はスペインで生活するすべての信徒を統括する組織を立ち上げたいと考えるようになったという (Guèye 2002 : 250)。1990年に第5代ハリフジェネラル、セリーヌ・ファロー・ンバケ (Serigne Fallou Mbacké) の息子、セリーヌ・モドゥ・ブツソ・ディエン・ンバケ (Serigne Modou Bousso Dieng Mbacké) がスペイン各地のダイラを訪問した際に、ダム・ンディアイは、スペイン在住のムリッド信徒が共同でトゥーバのために何かプロジェクトを行うことを提案し、長らく温めてきたアイデアの実現に踏み切った (Guèye 2002 : 251)。その後、ハリフ・ジェネラルから土地を譲り受けて、トゥーバに病院を建設するプロジェクトが選ばれたが、総予算60億CFAフラン(当時、1 CFAフラン=約0.004ドル)<sup>10</sup>を集めるにはスペイン在住の信徒のみでは力不足ということが明白になり、結局、世界中に散らばる信徒が協力して、病床数200程度、300人の従業員を雇う病院が建設された (Guèye 2002 : 251 ; Sylla 2010 : 20)。これが世界に散らばるディアスポラを構成員に抱える国際的なダイラ・マトラブル・ファウザイニ誕生のきっかけとなった。農村から移民が流入したのはダカールのみではない。特に、トゥーバの人口は1976-1988期間で29,600人から138,600人と4倍以上に増え、2010年時点で100万人を超えるセネガル第二の都市へと急拡大を続けている (Sylla 2010 : 18)。聖都の拡大に伴い、公共インフラの整備は必須であり、マトラブル・ファウザイニは、ハリフ・ジェネラルの意志を実現するための資金集めをまきに行っているのである。

マトラブル・ファウザイニの本部はトゥーバにおかれている。Sylla (2010) によるとイタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、ドイツ、アメリカ、セネガルに支部がある。いずれもセネガル移民の多い国である。それぞれの支部は支部の下に部 (section)、その下に科 (sous-section) が置かれる階層構造を構築している (Guèye 2002 : 254)。各支部には、信徒からの献金を集めるための銀行口座が開かれており、毎年、そこに集まった献金がトゥーバの本部の口座に振り替えられる (Guèye 2002 : 254)。マトラブル・ファウザイニのメンバー数は、21世紀初頭で、6万人 (Guèye 2002 : 249)、メンバーは、生活する国の経済水準を反映した年会費 — 例えば21世紀初頭の時点で、セネガル在

住メンバーは、2,500CFAフラン(約500円)、アメリカ在住メンバーは40,000CFAフラン(約8,000円)を払う(Guèye 2002: 254)。年に一度総会が開かれ、そこで会計報告、予算、新しいプロジェクトが決定される(Guèye 2002: 254)。特に力を入れているのが、衛生や配水分野になり、セネガル政府の行政とも連携して大がかりなプロジェクトを実現させている。つまり世界に散らばるムリッド・ディアスポラから資金を集めてトゥーバの生活環境改善プロジェクトを実現するという、まさに国際NGOのような役割を果たしているのである。

#### VII. 1. 2. 4 ダイラ・mam・ジャーラ・ブツソ

mam・ジャーラ・ブツソ(Mame Diarra Bouso)とは、良妻賢母の理想像として、ムリッド教団の女性信徒の間でカリスマ的存在となっているバンバの母の名前である。彼女の名前を冠したダイラは世界中に存在する。筆者が調査地としているニューヨークにおけるダイラ・mam・ジャーラ・ブツソでは、子供のためのクアラン暗唱大会を催したり、セネガルから送付された服を貧困者に配布したりするといった活動をしている。このように一般的には、ダイラ・mam・ジャーラ・ブツソは女性信徒のためのダイラと考えられている。しかし、通常ダイラでも、男性と女性双方の代表者をたて、女性信者たちの意向は、女性の代表者を通じてダイラのリーダー達に伝えられる。つまり、伝統的なダイラにおいても、女性信徒のための組織は存在するのである。こうした組織とダイラ・mam・ジャーラ・ブツソの違いは、ハリフ・ジェネラルや特定のシェイクの指導下にあるダイラではないということにつきる。mam・ジャーラ・ブツソに関して多くの業績を残しているロザンデルによると、ダイラ・mam・ジャーラ・ブツソはmam・ジャーラ・ブツソの生き方を学び、讃えることを目的としたダイラであり、ロザンデル自身が1994年12月から1995年3月にかけて調査をおこなったトゥーバ近くのンバケ(地名 Mbacké)では、男性のメンバーもいたという(Rosander 1997: 122)。ダイラ・mam・ジャーラ・ブツソで最も重要な活動は、mam・ジャーラ・ブツソが埋葬されているセネガル南部のポロハン(Porokhane)にて、年に一度開催されているmam・ジャーラ・ブツソのマガルに参加することである。男性の信徒は、

巡礼の際の護衛としての役割も期待されている<sup>11)</sup>。女性信徒にとって、mam・ジャーラ・ブッソとポロハンは、男性信徒にとってのアマドゥ・バンバとトゥーバに準じるもしくはそれ以上の意味を持つという(Rosander 2009 : 20)。ポロハンには、女兒の為のダーラも存在し、そこで学ぶ女兒は全てmam・ジャーラ・ブッソと名付けられている。ムリッド教団においては、女性も、理論的には、マラブー(シェイク)になることができるが、イマームにはなれない。女性マラブーの数も実際は極めて限られる。多くの宗教がそうであるように、イスラームにおいては、生理中の女性は宗教儀礼を制限されることから、結果的に、女性はイスラームの宗教空間でマージナルな存在となりやすい。他方で、セネガル女性が夫の庇護下で家に閉じこもっているかというところというわけでもない。夫と別れて、行商や特技を生かして少なくない数の子供を養う女性は珍しくない。ダイラ・mam・ジャーラ・ブッソは、男性中心になりがちな宗教空間に新しく出現した女性主体の活動を実現する場としての役割を果たしているようである。

## Ⅶ. 2 ムリッド信徒と都市の経済活動

先にみたように、1940年代以降、農村から首都ダカールに人が移動する流れがみられた。多くはバオル地域の出身者であり、彼らの多くは小規模商人として生計をたてたことから、こうした人々はバオル-バオル(Baol-Baol)と呼ばれた<sup>12)</sup>。バオルはムリッド信徒が多くいる地域として知られており、現在、ダカールではバオル-バオルというと、ムリッド商人を意味する(Sylla 2010 : 9)。後述するサンダガ市場やHLM市場はこうしたムリッド商人の活動の場としても広く知られている。

とりわけダカールでムリッド信徒の存在が目立つようになったのは1970年代から1980年にかけてのことである。1968年、1970年、1972年と干ばつが続く、1973年にはオイルショックに伴う世界的な景気停滞の煽りを受け、農業のみで生計を立てるのは困難になりつつあった時期と重なる(Bava 2004 : 135)。また、1980年という年は、サンゴールの「アフリカ社会主義」実現にあたって象徴的な組織「協力と開発アシスタンスのための公社(Office National de Coopération et d'Assistance au Développement : ONCAD)」(1968年創設)が破

綻するなど、独立後構築されたセネガル経済システムの綻びが見え始める年でもあった。このONCADは、落花生交易を中心に、種子や肥料を農民に提供し、高い値段で生産物を一元的に買い上げるマーケティングボードのような役割を果たしていた。セネガルの落花生生産を支えていた公社の破たんは、不透明で非効率な組織の再編という意味ではむしろ好ましいことかもしれないが、短期的には、農業で生活することが困難な農民の数を増やすこととなった。奇しくも、一次産品価格が停滞する1980年代に、プレトンウッズ機関による構造調整融資が開始され、非効率な公部門は縮小・廃止されていく。つまり、農村から都市にでてきても希望に満ちた生活が保障されているわけではなくなりつつあった。1970年代は、農村から各地域の主要都市、続いて、そこからダカールへの移民が増大するとともに、ダカールから世界各地への移民が本格的に始まる時期でもある。本節では、まずはセネガル国内の最大都市ダカールで、ムリッド信徒が教団を通じた人的ネットワークを利用して、都市での経済活動を展開していく様について紹介する。

多くの途上国で観察されるように、農村から都市に出てきた人々の多くは労働者として都市のスラムに住み、インフォーマルセクターを形成する。通常、インフォーマルセクターの定義にはいくつかあるが、インフォーマルセクターとフォーマルセクターの大きな違いは徴税や社会保障の対象となる経済活動であるかどうかになる。税金を徴収し、国民の社会保障を提供するのは国家であり、何等かの形で国家に報告される経済活動に対しては様々な形で納税の義務が発生する。正式に人を雇用すれば社会保障手続きを通じて国にそのことを報告し、社会保障費用を負担しなければならない。経済活動には、労働者と資本が不可欠であるが、国家が掌握しない経済活動に、銀行が融資をすることもなく、労働者が解雇されても失業保険の対象にはならない。したがって、インフォーマルセクターの経済活動の規模は必然的に零細にならざるを得ず、フォーマルセクターで必要とされるような人があえてそうした場所で働くこともない。当然のことながら、その性質ゆえにインフォーマルセクターの規模を正確に測ることは不可能である。しかし、2013年時点の世界銀行の各国紹介サイトによると、セネガルのインフォーマルセクターが国内総生産に占める比率は60%と見積もられており<sup>13)</sup>、セネガルでは、イン



フォーマルセクターにおける経済活動がフォーマルセクターのそれを上回っていることがおよそ理解できる。こうしたインフォーマルセクターにおいて、ムリッド信徒達が教団のネットワークを利用して助け合って生きていく様は、小川了(1998)に詳しい<sup>14)</sup>。

本研究の第Ⅱ節にみたように、ムリッド教団は、ウォロフ社会の職人階級(カースト)を多く惹きつけた。また、フランス式近代教育よりも、むしろダラ・タルビーヤのようなところでしか教育を受けていない人も少なくなく、結果的に、農村から都市に移住したムリッドの信徒たちは、インフォーマルセクターの職人として、もしくは商業や輸送部門で生業を得るものが多かったとされる(Babou 2002:156)。なぜなら、旧宗主国フランスの影響を強く受けたフォーマル部門で職人として認知されるには、相応の職業訓練を受けたことを証明する資格(attestationやdiplôme)が必要とされるからである。当然のことながら、正規の学校教育を終えるか終えないかのうちに、親方の許に弟子入りして技術を習得しただけのような人物が都市で仕事を得るのは容易ではない。しかし、未熟であったとしても何らかの技術をもっていればまだましであろう。大多数の都市移住者はそうした技術も学校卒業資格ももたず、成功した同胞の庇護下で、日銭を稼げる都市の商業セクターやタクシー運転手などの仕事に従事することになる。

興味深いことに、本研究の第Ⅴ節でみたマラブーとタリベの関係は、こうしたインフォーマルセクターにおける親分(Big Man)と子分関係においても効果的に作用している(Ebin 1992:97; Salem 1981:115)。タリベがマラブーに全面的に服従し、マラブーを敬うと同時に、マラブーから一定の資源配分や社会保障に相当する支援が供与されるのと同じように、サービス産業の世界でも、若者が年配者に全面的に従う一方で、年配者が若者の面倒を見るという構図がみられる。たとえば、特定のセネガル商人を取り上げてムリッドの世界を示したSalem(1981)には、先に都市や外国に出て一定の成功をおさめたムリッド商人が、後から来た若者に、最低販売価格を超えた分は全て若者の取り分にするという条件で商品を前貸ししたり、運転手を志す若者が免許を取得するまで面倒を見たりする様子などが記されている。エビンは、こうした社会関係の中で、年配のムリッド商人が、若者たちをうまく統括するこ

とが可能となり、市場のカオスに一定の秩序を創出することに成功していると分析する。主流派経済学では、しばしば、完全に情報を掌握した市場のアクター達が、己の利益を最大化するために合理的に行動すると仮定される。しかし、こうした行動は時として市場の暴走や独占、寡占といった現象を生み出す。しかし、ムリッド社会にみるように、人々の紐帯が非常に強い世界では、年配者が若者に命令や金銭、そして機会(チャンス)を授け、若者は勝手気ままに行動することを自制する。それが好ましいか否か、長期的な安定に結びつくかはさておき、短期的には市場の安定、秩序形成に寄与することになる。こうしたことからエビンは、セネガルにおいては国家よりもこれらスーフィー・タリーカの方が雇用創出や経済成長に貢献していると評価する(Ebin 1992: 98)。

ダカールにおけるムリッドの経済活動について論じたDiop M. C. (1982a) では、こうした親分たちが紹介されている。例えば、先にみたエル・ハジ・ババカル・ケベ(El Hadj Babacar Kébé)は、1970年代半ばの時点で、既に、不動産、繊維品販売、食品、建設資材の輸出入ビジネス、ホテルビジネスを行う一大企業家として名を馳せていた。彼は、ハリフ・ジェネラルとも親密であり、1979年のマガルでは、トゥーバのモスクのために800万CFAフラン(当時のレートで4万ドル<sup>15)</sup>)のシャンデリアを寄進したり、マラブーに車を贈与したりしている(Diop, M. C. 1982a: 97)。次に紹介されるハリフ・ジェネラルの第一秘書をつとめていたカリム・ファル(Karim Fall)は、潤滑剤や発動機燃料の販売活動や運送業を展開している(Diop 1982a: 97)。ジョップは、こうした高い経済力を持つムリッド信徒が、教団の中核にいるマラブーと緊密な関係にあり、教団の運営に影響を与えたと指摘する(Diop, M. C. 1982a: 98)。先にみたように教団は政治にも強い影響力を与えるため、間接的にこれら企業家達が政府からさまざまな便宜を享受することも可能であったはずである。

他方、中小零細ビジネスにおいても、ムリッドのネットワークは有効に働く。たとえばダカールのサンダガ(Sandaga)市場の強固なネットワークは、国家が徴税や規制と言う形で市場に介入することを阻んだ<sup>16)</sup>。サンダガ市場では、1933年に創設された建物の周辺に、間口わずか1～2メートルの小さな商店が集積しており、インフォーマル・ビジネスの比率も高い。ここには、

ムリッドネットワークを通じて世界中から持ち込まれたありとあらゆる品々が陳列されており、セネガル国内のみならず近隣国からやってきた商人達によって再び西アフリカ一帯に運びだされる。類似の商品を扱う店が近接していることも珍しくなく、海外から商品を仕入れる際に、ムリッド信徒の店主たちはコンテナを共有してコストを下げるといった工夫をしているという<sup>17)</sup>。先にみたトンチンを通じて、投資資金を確保することも盛んに行われている(Balkenhol and Gueye 1994)。これら中小零細企業は協力することによってしか、西アフリカで大きな経済力を持つレバノン-シリア系の商社と競う力を保てない(Diop, M. C. 1982a: 100)。ムリッドのネットワークは、そうした協力を可能にする信頼を担保している。彼等のネットワークは強固であり、ひとたび仲間を裏切ると、二度とそのコミュニティに戻ることはできない。ムリッド教団という、同じ中間組織に帰属するという事実が、短期の市場取引では創出することが難しい、信頼や安心を醸成することに繋がっていることは明らかである。

これら都市における中小零細企業のパトロン達が、地方から出てきたばかりの同じ教団に所属する若者や、一般的な条件で仕事を請け負うのが困難な老人などに、とりあえずの職を提供することも報告されている。たとえば、サンダガ市場には、実際に店を構えてビジネスを展開する店主やその従業員以外に、明らかにそうしたビジネスに寄生する無店舗個人事業主が多数活動しており、我々のように明らかによそ者に見える者がサンダガ市場にひとたび足を踏み入れると、頼みもしないのに道案内を勝手出たり、こちらが何を探しているのか聞き出してそれを売っている店に半ば強引に連れていこうとしたり、どこからともなく目的の商品をもってきたりする若者に必ずといってよい確率で出くわす。彼らはそれぞれの店で何がどれくらいの値段で販売されているかを把握しており、店主の寛大さを利用して、自分が捉まえた客にマージンを上乘せした値段で商品を売りつけようとするのである。従って、店に入っても、あたかもその店の従業員なのかと錯覚してしまうような態度で顧客であるわれわれに商品を説明したり、価格交渉のイニシアティブをとったりする。こうした若者は、エビンによると、ウォロフ語で食べ物求めて海の底を動く魚を意味するニューロ・マン(nyuro-man)と呼ぶそうだ

(Ebin 1992:91)。対して、そのことに気づかずに店が決めた値段にマージンを上乗せした価格を支払う顧客は、釣り人の網にまんまとひっかかる「馬鹿な魚」を意味するンガカ(ngaka)と呼ばれる(Ebin 1992:91)。これ以外にも、店から商品を卸してもらい、街中を行商して日銭を稼ぐバナバナと呼ばれる若者もいる。また、年老いた者の中には、こうした若者を見張ったり、店の雑用をしたりして、店からわずかな小遣いを稼ぐ者もいる。

こうしたネットワークの強さ、相互扶助関係の強さは、部外者から時として羨望もしくは、その裏返しの感情である妬みの対象となる。社会保障制度が十分に整備されていないセネガルのような国においてはなおさらである。Salem(1981)では、1970年代の時点で、ウォロフのみならず、セレールの若者たちの間でムリッドに改宗する者が多くいたことが記されている。その多くはバイ・ファルになったという(Salem 1981:138)。近年では、プルやジョラはもちろんのこと、セネガル人のみならず欧米人においてもムリッドに改宗する人たちが見られる。単にバンバの思想に共鳴するというだけでなく、こうした人的ネットワークの強さ、つまり共同体としての魅力が、戦後、急速に信徒を増やし、今や人口の三分の一、400万人という信徒を抱えるまでに急拡大した要因の一つと考えられる。

謝辞:本研究は科学研究費補助金(種目 基盤研究A 細目 経済理論 課題番号23243033, 研究課題 “中間組織の形成過程と経済的機能:アジアとアフリカに関する歴史的・理論的研究” 研究代表者:寺西重郎教授(日本大学))の助成を受けて実施されました。また、本研究を実施するにあたり、Samar Moustapha氏(金沢大学大学院生)にアラビア語およびイスラームについての知識を教授いただきました。ここに記して感謝の念を示します。

- 1) Babou(2007)によると、1913年の段階で、サンレイでは140人の、ダカールでは150人のムリッド信徒が数えられたという(p.201)。
- 2) サンレイでは1976年から毎年9月5日前後の数日間、ダカールでは、1988年に最初のマガルが開催され、2002年以降、毎年、9月18日から20日に開催されている。9月5日は、サンレイの総督府でバンバの流刑が決定された日にあたり、9月18日か

ら20日という期間は、バンバがサンレイからガボンに向けて運ばれる途中にダカールに滞在した期間に該当する (Babou 2007)。

- 3) 西洋竹馬と呼ばれるものの一種で、足の下に長い棒をつけてその上からズボンを履き、極端に足の長い道化師などを演じるパフォーマンス。ムリッド教団の教義に関係があるとは思えない。
- 4) トンチンとは17世紀のイタリア人銀行家、Tontiの名を冠したインフォーマル金融であり、フランス語圏アフリカではインフォーマル金融を総称して「トンチン」と呼ばれる。
- 5) ヒズブ・タルキーヤの沿革に関する情報は文献によって異なる。たとえば、Loimeier (2009)やGuèye (2002)のように、ムリッド教団に関してよく引用されている文献においても情報が錯そうしている。ここでは、年号についてはヒズブ・タルキーヤのホームページに準拠して示している。なお、ヒズブ・タルキーヤが創設されてからの38年間は、ムリッド教団内での諍いや分裂と不可分の歴史でもあった。ヒズブ・タルキーヤの名称がついたホームページは複数あり、ダイラやダーラの関係も明確ではない。本稿では、実際にマガルでの配布物に掲載されているホームページ<http://htcom.sn>の情報に基づいて論じた。
- 6) ユニセフの統計によると、セネガルの2007-2011年期間における成人の識字率は50%、男性の中等教育就学率は35%、女性のそれは32%ということである。[http://www.unicef.org/french/infobycountry/senegal\\_statistics.html](http://www.unicef.org/french/infobycountry/senegal_statistics.html)
- 7) セネガルのバカロレアには、大学進学に繋がるBac généralと職業高校出身者を対象としたBac techniqueの2種類が存在する。二つのバカロレアを合わせても、2013年の合格率は39%、2012年のそれは38.8%に留まる。*Enquête plus*, 2013年7月20日。
- 8) Loimeier (2009) p.251の注56。
- 9) ハディム・シーラ博士はセネガル政府に勤める傍ら、教団の上層部からも一目置かれた人物で、ムリッド教団が開催するコンフェランスにパネリストとしてしばしば招待されている。本レポートは、2012年にニューヨークで開催された文化週間の際に、直接、博士から手渡された。
- 10) ちなみに、Sylla (2010)では約50億CFAフランとなっている (p.20)。
- 11) ロザンデルが<sup>3</sup>、ンバケのダイラ・マム・ジャーラ・ブツソのダイラ長に、「なぜ男性信徒がいるのか?」と尋ねたところ、ハサイドを唄うため、男性にしかできない肉体労働をしてもらうため、そして護衛のためということであった (Rosander 1997 : 123)。
- 12) ウォロフ語では、バオル出身者はバオルーバオル、ワロ出身者はワローワロ、ンバケ家出身者はンバケーンバケとなる。
- 13) <http://www.worldbank.org/en/country/senegal/overview> (2013年7月16日閲覧)
- 14) 小川了 (1998) は、ダカールのインフォーマルセクターとムリッドの関係に早くから注目し、おそらく日本語でまとめた最初の研究になる。文化人類学者としてセネガ

ルの人々に対する関心から都市の経済に注目し、それを国家との関係で論じる本書は、セネガルに関心を持つ人にとって必読の書といって良い。

- 15) 1994年切り下げ以前の当時、1 フランスフラン=50CFAフランであった。対して、1970年代半ばのドルとフランの関係はおよそ1ドル=4 フランスフランであったことから、1ドル=約200CFAとなる。
- 16) 2013年10月19日に、突然、ダカール当局はこのサンダガ市場を安全上の理由で閉鎖する命令を出した。サンダガ市場は植民地時代にダカール市の中心部に設立され、多くの市民や観光客に親しまれてきたが、老朽化は否めず、交通の障害になっていたことは事実であった。その一週間後の2013年10月25日に、不審火で火災が発生し、今後の見通しは不明となっている。
- 17) サンダガ市場で女性用コスメティック商品を扱う店主による説明(2012年3月、サンダガ市場での聞き取り調査より)。

#### 参考文献

- Babou, C. A. (2002). Brotherhood solidarity, education and migration: The role of the Dahiras among the Murid muslim community of New York. *African Affairs* (101), 151-170
- (2007). Urbanizing Mystical Islam : Making Murid Space in the Cities of Senegal. *International Journal of African Historical Studies*, 40 ( 2 ), 197-223.
- Balkenhol, B., & Gueye, E. H. (1994). *Tontines and the banking system—is there a case for building linkages?* Poverty-Oriented Banking (INT/92/M01/FRG). ILO. Geneva.
- Bava, S. (2004). Le Dahira Urbain, Lieu de Pouvoir du Mouridisme. *Les Annales de la recherche urbaine* (96), 135-143.
- Bouman, F. J. A. (1994). ROSCA and ASCRA : Beyond the Financial Landscape. In Bouman, F. J. A. & O. Hospes (Eds.), *Financial Landscapes Reconstructed: The Fine Art of Mapping Development*. Boulder. Westview Press.
- Diop, M. C. (1981). Fonctions et activités des dahira mourides urbains. *Cahiers d'études africaines*, 21 (81-83), 79-91.
- (1982a). Les affaires mourides à Dakar. *Politique Africaine* (45), 90-100.
- (1982b). Le phénomène associatif mouride en ville : expression du dynamisme confrérique. *Psychopathologie africaine*, 18 ( 3 ), 293-318.
- Ebin, V. (1992). A la recherche de nouveaux “poissons” : Stratégies commerciales mourides par temps de crise. *Politique africaine* (45), 86-99.
- Guèye, C. (2002). *Touba : la capitale des mourides*. Paris ; Dakar : Karthala ; IRD, Institut de recherche pour le développement ; ENDA, Environnement et développement action.
- Loimeier, R. (1998). Cheikh Touré un musulman sénégalais dans le siècle du rëformisme à l'islamisme. In Kane, O. & J. -L. Triaud (Eds.), *Islam et islamismes au sud du Sahara*.

- Paris : Kharthala.
- (2009) . *Dialectics of Religion and Politics in Senegal*. In Diouf, M. & M. Leichtman (Eds.), *New perspectives on Islam in Senegal*. New York : Macmillan.
- Maiga, A. A. (2013) . *Religion and Economic Activities in the Murids' Islamic Brotherhood of Touba, Senegal*. Master of Philosophy in Visual Cultural Studies, University of Tromsø.
- Rosander, E. E. (1997) . *Women and Mouridism in Senegal—The case of the Mam Diarra Bousso dahira in Mbacké*. In Ask, K. & M. Tjomsland (Eds.), *Women and Islamisation — Carving a New Space in Muslim Societies*. Bergen : Chr. Michelsen Institu.
- (2009) . *Murid Women and Mame Diarra Bousso—A Relationship of Love and Veneration*. In MICA (Ed.), *Magazine distributed in Shaykh Ahmadu Bamba's day, 21th Cultural Weeks in USA*.
- Salem, G. (1981) . *De Dakar à Paris, Des Diasporas d'artisans et de commerçants: Etude Socio-Geographique du Commerce Sénégalais en France*. Doctrat de 3ème cycle, EHESS, Paris.
- Sylla, K. (2010) . *Les Faiblesses du rapport du Giaba sur Touba à la lumière de la vérité des faits*.
- Villalon, L. A. (1999) . “Generational Changes, Political Stagnation and Evolving Dynamics of Religion and Politics in Senegal”, *Africa Today*, 146 (3-4) , 129-147.
- 小川了. (1998) . 『可能性としての国家誌—現代アフリカ国家の人と宗教—』:世界思想社.

